



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3756号 2017.7.6 発行

子どもの「精神障害」はかなり誤解されている



児童精神科医・滝川一廣さんが語る「歴史」
杉山 春 東洋経済 2017年07月03日
児童精神科医の滝川一廣さんに話を聞く（撮影：梅谷秀司）

児童精神科医の滝川一廣さんが3月に出した『子どものための精神医学』が話題だ。帯に“素手で読める児童精神医学の「基本書」”とあるが、編集を担当した医学書院の白石正明さんによると、親のほか、養護教員や学童保育指導員などが手に取っている。

40年を超える臨床経験と、この間、大きく研究が進んだ児童精神医学を踏まえて、平易な言葉で、子どもの発達とはなにかを「根本から説き起こす」ことを目的にしたという。

診断とはそもそも何か？

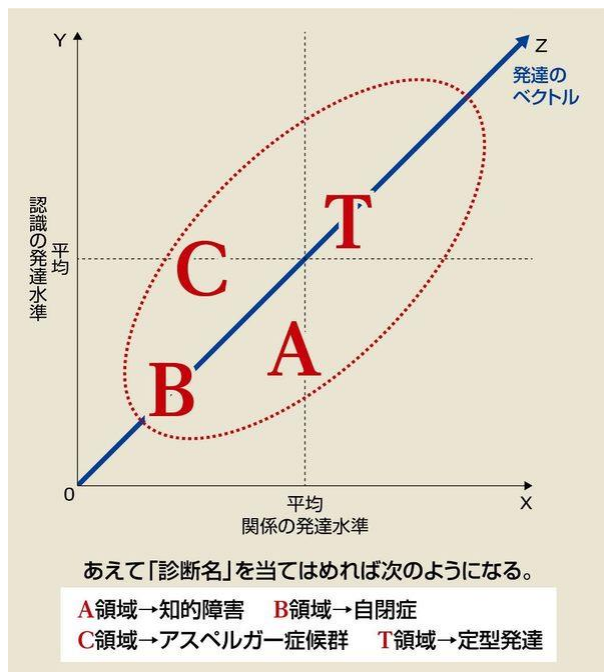
——本書は精神医学の歴史から始まります。身体の医学は太古の昔に始まったが、精神医学は近代の合理的な人間観の確立後に生まれたと。身体の医学は自然科学であって、個人の身体の中で完結する。しかし、精神医学は自然科学に収まらず、共同性・関係性の視野の中でとらえると。

でも、たとえば子どもが「発達障害」だと診断されたとき、多くの親は身体のお医者様の診断と、児童精神科のお医者様の診断は違うものだと考えないのではないのでしょうか。

↳ 診断とは何かということです。医師が風邪と診断するのは、自然科学です。疾患が起きている体の場所、起きる仕組み、病気の原因が共通しているとき、同じ種類の病気だと診断できる。

しかし精神障害は、外から見たその子の行動の特徴を分類し、引き出しに入れることにすぎません。自閉症の引き出しに入る、あるいは知的障害の引き出しに入ると。精神障害の診断は医学的診断ではありません。社会的判断です。

——診断がくだれば、皆、同じ治療で治るわけではないということですね。



本の冒頭にある、「認識の発達」水準を縦軸に、「関係の発達」水準を横軸に取った座標が目飛び込んできます。

A領域：知的障害、B領域：自閉症、C領域：アスペルガー症候群、T領域：定型発達と表示されています。しかし、線で明確に区分されているわけではありません。

人間の赤ちゃんが見知らぬ新しい世界を知っていくのが「認識の発達」。世界に働きかけ、働きかけられる関係性を育んでいくのが「関係の発達」。これが X と Y の座標軸として置かれます。そして両者が相互に支え合い、子どもは成長していくという、発達を示した図ですね。この図は滝川さんのオリジナルですか。

ええ、そうです。こうすることで、この子は認識に課題をもつ知的障害、この子は自閉症、と分けるのではなくて、定型発達も含めてひとつながりだということが見て取れます。子どもには「ばらつき」がある

——私たちはいつの間にか、子どもというのは、どの子ども似たような存在で、成長は一直線上にあるようなイメージを持っています。でもこの図は、子どもにはばらつきがあることを思い出させてくれます。地図のようで、思わずわが子や自分がどこにいるのだろうかと思いたくなります。

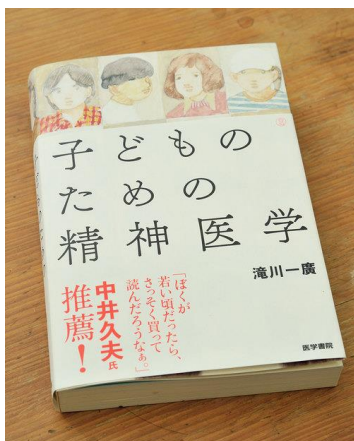
子どもには、生まれたときが最もばらつきがある。それが、成長の過程で、精神発達を遂げた大人たちや環境に働きかけ、働きかけられ、認知と関係性をそれぞれ発達させ、その社会と文化を生きることができる存在へと育っていきます。

——精神障害は、社会や文化の変化の中で発見されてきたのですね。

昔から「知恵遅れ」とか「白痴」という言葉があり、理解や判断力が落ちている人がいることはわかっていました。しかし、知的障害がクローズアップされたのは、19世紀に近代学校教育が始まってからです。

また、関係の発達の課題が発見されるのは1943年。アメリカの児童精神科医のカナーが自閉症を報告してからです。それまで関係性発達障害は問題になりませんでした。

——知的障害、自閉症スペクトラム、学習障害、ADHDなど、多様なものと考えてしまう。でも、本書では精神障害とは「人とかかわりにおける、なんらかの直接的な困難な苦しみとして現れるとする」と規定しています。



昔は今ほど子どもに手をかけなくても育てられました

昔のほうが大人として身に付けなければいけない力は単純でした。生産活動が何より重要で、生きることによって精いっぱい。それに必死にならないと、飢饉が起きた。生産活動に直接関係しない対人能力や社会性は、一部の人以上、それほど重要ではありませんでした。

子どもたちについても、今ほど手をかけなくても育てることができた面がある。畑仕事に連れて行って、寝かせておいたり、遊ばせたり、手伝いをさせたり。大人の生活圏と子どもの生活圏も今ほど分かれていませんでした。

子どもたちはその中で14～15歳になれば大人としてやっていけた。性的に成熟すれば、そのまま大人になれた。

ところが戦後、中学が義務教育となり、子ども期が15歳まで延びました。さらに、1970年代になり9割以上のティーンが高校に行くようになり、子ども期はさらに18歳まで延びました。大人の生活圏と、子どもの生活圏は分けられました。

性的に成熟しても社会的には大人になれない。そこから、思春期問題が始まりました。

日本で思春期研究の本が初めて書かれたのが、1972年です。私が児童精神科医として働き始めたのは1975年ですが、このころは思春期に関する論文が花盛りでした。私が最初に書いた論文は摂食障害についてです。

人の孤立が進んでいる

——産業の変化とともに、生活の場が人々の暮らしの共同体ではなくなった。人の孤立が

進んでいます。

子育ては昔に比べ手厚くなっています。手薄な子育てより、手厚いにこしたことはありませんが、親が孤立して、狭い世界の中で子育てが行われている。親が何らかの形で、力を失えば、一気に手厚い子育ては不利になります。それが今、虐待と呼ばれるものではないでしょうか。

——実は自閉症と言われたり、知的障害と言われたりする、発達の遅れた子どもたちはそうではない子どもたちに比べ、不安や緊張の高い、孤独な世界を生きていると本書は指摘します。私たちは意味や約束を通して、この世界をほかの人々と分かち合い、職場の世界、家族の世界、友だちの世界、それぞれ意味が異なる何層もの世界を行き来している。ところが、認識の発達の遅れは、人々のもつ共同の世界へ参入を難しくする。子どもたちの逸脱や問題行動のわけを探っていくと不安や緊張の問題に行き当たると。

社会の側からみているとわからないかもしれませんが、知的に低ければそれだけ孤独です。孤独では生きていけない。

診断名が見つからないから様子を見ましようというのではなく、発達分布図の、今どの辺りをその子どもが歩いているのかを知り、遅れているところを支え、伸ばすことに留意した子育てのかかわりをさっそく始めてほしい。1回限りの人生ですから。

虐待を防ぐには孤独に育つ子どもを減らすことが重要

——私は子どもを虐待死させる親たちの取材をしてきました。こうした親の子ども時代は本当に孤独です。人を信じる力も弱い。

そうでしょう。いかに孤独に育つ子どもを減らしていくかが、虐待を防いでいくことになると思います。人を信じる力を育てるには、実際に人とかかわらなければ。人とかかわって安心する、助かったという体験を重ねて、初めて人とかかわる力が出てくる。

もともと子育ては、大変な仕事です。親がうまく育てられなかったり、子どもがちょっと育ちにくいハンディを持っていたり。ゆとりを持って子育てをする生活基盤が脆弱だったり。子育てがうまくいかないのは、親だけの責任ではないということがみえにくい。子育てが大変な赤ちゃんはいくらでもあります。なかなか泣きやまない赤ちゃんとか、ミルクを飲ませてもすぐ吐いてしまう赤ちゃんはいっぱいいる。

生活基盤にゆとりがあれば、子どもが夜泣きをしても根気強くかかわり続けることができます。トイレトレーニングもじっくりかかわれる。でも、いくつかの悪条件が重なると、どうしてもいかわからなくて、赤ちゃんをたたいてしまったり、揺すぶってしまうということが起きます。

人とかかわれない不幸を「虐待」と名付けてバッシングするだけではダメなんですね。

——「**『貧困・格差の一定以上の解消をはかる政治的、経済的な施策なくしては、いかなる『先進的』な（虐待）防止対策も焼け石に水かもしれない』**と書いていますね。滝川さんは虐待防止法以前、1980年代には児童相談所に勤務する児童精神科医でした。

摘発型の虐待防止では、子育ての失調は防げない。当時、イライラして、赤ちゃんの指をかみ切ってしまったお母さんがいた。今だったら、すぐに虐待だと判断されて、子どもは取り上げられてしまう。でも、この時は親子関係の失調として、その間を取り持つ支援をしました。子どもを分離せずに育てることができました。

今は虐待という言葉が一般的になり、一方的に親が悪いというイメージが広がりました。親である以上、子どもをしっかり育てなければという圧力はとても強い。愛情と責任さえあれば、子どもは育つという一種の思い込みがあります。うまく育たないと、愛情か責任感に欠けた親だと言って責める。

虐待という言葉はよくないです。虐待と名付けるとその家族を否定的に見る。あなたは悪いことをしているというまなざしの中で家族統合といってもうまくいかない。

でも、子どもはそれぞれ違って、同じように育てれば同じように育つというわけではないのです。また、こういう人生が幸福だという模範解答はない。それぞれに与えられた条件があり、それぞれの子どもが持っている力があり、親の置かれている条件がある。

そのなかで、今、この子はこれ以上頑張るのは難しいとか、この子なら背中を押してあげれば立てそうだとかということがあります。何がいいかはそのときどきで変わる。その判断を全部親がしなければいけないというのも大変なことですね。

だからこそ、親一人の子育てには無理があるということです。『子どものための精神医学』は、分類して、この子育てが正しいと白黒つけて安心するための本ではなく、白と黒の間を埋めていくための本です。

サポートがあれば、なんとかしのいでいける

—どのような社会的な支援があるといいのでしょうか。

妊娠した時から全員に専門家がかわり始めるサポートがあるといいと思う。抱っこが下手でもサポートがあれば、なんとかしのいでいける。大丈夫な親子から手放していけばいい。こじれてから支援をするよりも、費用対効果としてもずっといいのではないかと思います。

「みんなが同じだと安心できると思っている人へ」 毎日小学生新聞 2017年7月3日
しえんがつきゅう ゆういちろう よ

支援学級・勇一郎さんの呼びかけ

みみ き ひと おお き ひと すく がっこう い ひと おお い い
耳が聞こえる人は多く、聞こえない人は少ない。学校に行く人は多く、行かない、行けない人は少ない。多数派がいるところには少数派がいますが、世の中はとかく、多数派のルールで動いています。少数派の声は届いているのでしょうか。

かながわけんよこはまし しょうがく ねん ゆういちろう とくべつしえんがつきゅう よこはまし こべつしえんがつきゅう い
神奈川県横浜市の小学4年、勇一郎さんは特別支援学級（横浜市では個別支援学級と言います）で学んでいます。左の作文は勇一郎さんの声です。「『出来ないから支援級にいるんだろう』と思っている人がいます。でも本当は出来ないわけではなくて、安心できる場所で少人数で練習すれば出来るようになる」「将来なれることも増えます」

だれ かに 書 いて くれた の かな きしゃ と ゆういちろう い じぶん
「誰のために書いてくれたのかな」。記者の問いかけに勇一郎さんは言いました。「自分のためと、支援級の友達のため」

じったいけん まいはん
実体験を1枚半に

ふだんかんが さくぶん か かながわけんよこはまし しょうがく ねん ゆういちろう
「普段考えていることを作文に書いてほしい」と神奈川県横浜市の小学4年、勇一郎さん
ねが がつなか か い じたく い ま したが
んにお願いしたのは6月半ばでした。「書きます」と言ってくれました。自宅の居間で下書きすること2時間。「世の中の人たちに知ってほしい」と書き上げた原稿用紙1枚半の作文には、自らの実体験が盛り込まれています。

ゆういちろう れきし だいす せんごくじだい かんしん しゅうまつ かあ
勇一郎さんは、歴史が大好きです。とりわけ戦国時代に関心があります。週末にはお母さんと城や城跡を訪ね、写真と文章で記録してきました。すでに50～60か所を巡ったそうです。大好きな歴史であれば、大人向けの本も読みます。エレキギターを習い、ペットの猫をかわいがっています。

どうさ ひょうじょう よ と にがて
動作や表情、読み取るのが苦手

そんな勇一郎さんには、とても苦手なことがあります。人の動作や表情の意味を読み取ることに苦労します。音に敏感で、にぎやかなところでは、落ち着くことができません。脳の働きが原因とみられる自閉症スペクトラム（アスペルガー症候群）だからです。友達や先生に声を掛けるタイミングを計るのも一苦労です。勇一郎さんは「無視されたらつらくなる。でも、無視しようと思っただけじゃなく、無視しているわけじゃないこともわかっている」と言います。いろいろ考えるうちに緊張が高まり、黙ってしまうのです。

困らない人が多数派

勇一郎さんがこんなふうになっていることは、周りの人にはなかなか伝わりません。周りの人は少しぐらいにぎやかでも困ることはありません。人に声を掛けることも、そこまで大変ではない人の方が多いでしょう。「困らない人」がこの社会では多数派だからです。

勇一郎さんはお母さんから、なぜ苦手なことがあるのか、自分の特性について説明を受けて育ちました。自分が少数派であることも、困っていることは多数派の人に自分から伝えたい方が多いということも教わりました。文章が書けるようになると、困っていることを書いて伝えるようになりました。

「みんなも考えて」

小学校では特別支援学級（横浜市では個別支援学級）に入りました。先生が1人ずつ教えてくれるので、教室で緊張したり、困ったりせずに勉強をすることができます。小学校に入学してから3年が過ぎ、作文にあるように「ゆっくり練習をして」きました。4年生に進級してからは、体育などの一部の教科以外は、特別支援学級ではなく、4年生の学級で授業を受けています。

「学校に慣れてきた」と言う勇一郎さんですが、みんなと同じでなければならないとは考えていません。それよりも、違っていていいんだ、と思う方が「いい世の中になると思えます」と作文に書きました。違いは違い。多数派も少数派も共に生きる。作文の最後の一文「みなさんはどう思いますか？」は、「考えてほしい」という勇一郎さんの呼びかけです。

* * *

みんなが大切にされる社会を作ろうと、国連で「障害者権利条約」が生まれ、日本国内では法律が整備されてきました。けれども昨年7月、重度の障害がある人たちの命が奪われる事件が起きました。「みんなが大切にされる社会」のために、何ができていないのでしょうか。何をすべきでしょうか。あれから1年、改めて考えます。【望月麻紀】

多数派のルール

勇一郎さんのお母さんは友達に対する「バイバイ」の仕方を、イラストを描いて丁寧に説明しました。相手の方を向かずにバイバイをする勇一郎さんのことが、友達にはどう見え

るのか。社会には、勇一郎さんには見えにくい多数派のルールがいっぱいあるのです

■ 勇一郎さんの作文

「みなさんに知ってほしいこと」

個別支援級にいる子に対して、「出来ないから支援級にいるんだろう」と思っている人がいます。でも本当は出来ないわけではなくて、安心できる場所で少人数で練習すれば出来るようになるし、得意な事も伸ばせます。得意な事が増えれば自尊心が増えるので、将来なれることも増えます。だから支援級を選んでるのです。

ぼくは歴史が好きだから、自分の得意な事を通じてクラスメイトと仲良くなれました。先生の協力を得て、「得意なこと発表会」を作ってもらえたので、きっかけになりました。こんな風にきっかけがあれば、周囲の人たちに理解を得られます。理解と信頼をしてもらうと、とても生きやすくなります。

今いる学校は、苦手な事を無理矢理やらされないで、安心して学校に行けます。苦手な事は、校長先生や担任の先生に交渉して、ゆっくり練習をしています。

世の中の人へ

わざとらしい優しさや、決めつけた支援はしないでほしいです。ちゃんと理解してほしいので、僕たちの気持ちを聞いて下さい。もし、しゃべるのが苦手な子・書くのが苦手な子がいたら、その子の様子を見て気持ちを理解してあげてください。

みんなと同じが安心だと思っている人へ

誰もが同じだと、この世の中は成り立たないです。だから、「みんなちがってみんないい」という考えがあると、もっといい世の中になると思います。

みなさんはどう思いますか？

※ 原文にルビを付けました

人ごとでは解決しない 自分たちはどう変わったか 毎日小学生新聞 2017年7月4日

がっこう もとごうちょう きむらやすこ

「みんなの学校」元校長 木村泰子さん

いぼしよ おおさかしりつおおぞらしょうがっこう とくべつしえんきょういふく たいしやう こ

みんなに居場所を。大阪市立大空小学校では、特別支援教育の対象とされる子どもを含むすべての子どもたちが、同じ教室で学んでいます。誰もが通い続けられる学校づくりを実現しています。初代校長を務めた木村泰子さんが、相模原障害者施設殺傷事件から1年を振り返りました。【まとめ・長尾真希子】

事件は社会が生んだもの

この1年で何か変わったかというのと、何も変わっていないと思います。

あの事件は、異常な罪を犯した人を日本社会から排除して終わろうとしています。事件を

起こした人は「重度の知的障害者は生きていても意味がない」と言いました。「だから自分
はいいことをした。価値のない人間を抹殺した」という主張です。こうした主張をする人
を生んでしまったことに対して、日本は何も変わっていません。

また、亡くなった方たちは匿名でしか報道されませんでした。「家族のたつての希望」と
いうのは言い訳に過ぎません。家族に「書かないで」と言わせる日本社会、匿名でしか報道
できない日本社会を作っているのは、まぎれもなく自分たちです。いま、「自分たちはこの
1年でどう変わった？」というところが問われています。

誰も排除しない学校づくり

大空小では、インクルーシブ教育や障害という言葉は使いません。インクルーシブと
いうのは、障害がある子と、ない子がただ一緒に同じ教室で学ぶということではありませ
ん。大切なのは、一人として排除しないということです。障害のある子、健全の子という
ように分けること自体が差別です。大空小は地域に生きている子どもを誰一人として排除
せず、安心して学べる居場所を作るというのを最低限の使命としている学校です。

大空小を卒業した子どもたちが、あることをきっかけに学校に帰って来たことがあります
。別の小学校を卒業した同級生が、重度の知的障害の子と同じ教室で学ぶことを「邪魔
や、と言った」とのこと。「俺らの小学校では、こういうやつらは違う教室で勉強してい

いた。てゆうか、こいつら生きている値打ちあるんか」と言ったそうです。相模原の事件が起
きる前の出来事ですが、この言葉は事件を起こした人が言っていた言葉と一緒にです。

話を聞くと、子どもたちは「そんなことを言う子らって、不幸やろ。それってどうした
らいい？」という相談で来ていたんです。これこそ、障害ある、ないも関係なく、6年間い
つも一緒に当たり前、互いに学びあっている子どもたちが獲得したもののすごい力なのでは
と思いました。

必要なのは、あの事件を人ごとでなく、自分ごととしてとらえることです。そうしない限
り、事件は解決しないと思います。=つづく

□プロフィール 大阪市出身。2006年に開校した大阪市立大空小学校の初代校長。
先生になって45年を迎えた15年春に退職。現在は、全国各地で講演活動をしている。

■ことば インクルーシブ教育 インクルーシブは英語で「すべてを含んだ」とい
う意味です。すべての子が地域の学校の普通学級で学び、一人一人必要な支援や配慮も受け
られるようにする教育の仕組みです。1994年、国連教育科学文化機関（ユネスコ）が唱

え、世界に広がりました。日本では障害がある子とない子を分けて教育をしてきました。見直しの動きはありますが、地域によって取り組みには差があります。

ゆがむ社会、怒り弱者に みんなの意識に潜む“障害”

毎日小学生新聞 2017年7月5日

障害者の支援者・当事者 玉木幸則さん

障害者の自立支援を長年続け、NHK Eテレの情報バラエティー番組「バリバラ」でコメンテーターも務める玉木幸則さん(48)。自身も脳性まひで手足と言語に障害がある玉木さんが、この1年間、考えずにいられなかったことは――。【まとめ・長尾真希子】

結局人ごとなのか

相模原障害者施設殺傷事件のことは、この1年間、考えずにはいられませんでした。事件は、障害者差別解消法施行から4か月目に起きました。この法律は「障害がある人もない人も、互いに、その人らしさを認め合いながら、共に生きる社会をつくることを目指す」ためにつくられました。

しかし、事件は起きました。事件を起こした被告が衆議院議長宛てに書いた手紙は、事件を予告するような内容だったといわれていますが、実際に何が書かれていたのでしょうか。そもそも障害者が集団で暮らしていなかったら19人も亡くならないし、26人も傷ついていなかったのではないのでしょうか。なぜメディアはもっと突っ込む報道ができなかったのかと怒っています。あの事件は結局、人ごとなのでしょうか。

社会への不安や恐怖

「バリバラ」には、被告の考えに共感したという手紙が約100通届きました。障害が重度であればあるほど、生産性がない(経済への貢献が低い)から、社会には不要という主張です。このうち2人と番組内で緊急対談しました。

対談した結果、2人とも「自分もいずれ社会から切り捨てられるんとちゃうか」という不安や怖さを抱えていることに気づきました。そのうち1人の方は、自身にも発達障害があり、周囲に公表することで、社会から疎外されるという恐怖の中で生きているとのことでした。

こういう発想が生まれるのは、今の社会がゆがんでいるからでしょうね。国に期待できないし、していない。だから怒りの矛先を国ではなく、弱者に向けるのではないのでしょうか。

自分を大切に

生まれつき脳性まひの僕にとって、この体や、このしゃべり方は普通なわけで。障害があるとと言われても、今もピンと来ません。僕らが地域に暮らそうとした時、邪魔をする社会

や地域の仕組みそのものが実は障害であり、その仕組みを作っている、いわゆる健全者と
言われる人の意識や心に実は障害があるのではないのでしょうか。それを取り除くことで
障害はなくなっていくのだと思います。

みなさんには「障害者を助けようね」とは言いません。自分のことを好きになってね。
そして、しんどい（つらい）ときにはしんどいと言ってね、と言います。

これができるようになると、しんどそうな友達に「大丈夫か？」と聞けるようになる。
その中に、障害者と言われる人も含まれるかもしれない。自分を大切にしている人は、他の
人も大切にできるものです。=つづく

□プロフィール 兵庫県姫路市出身。日本福祉大卒。1992年から障害者の自立を支援
するNPO法人で活動。現在、社会福祉法人「西宮市社会福祉協議会」（同県西宮市）の
相談総務係長。

■ことば 障害者差別解消法 障害を理由にした差別などを禁止した法律。2016
年4月に施行されました。国や自治体に対し、障害者が求めたときに、設備を整えたり、
サービスを提供したりする「合理的配慮」をするよう義務付けています。民間の会社やお店、
団体には義務ではありませんが、努力するよう求めています。罰則はありませんが、差別を
繰り返し、改善が期待できない事業者には国が指導などをします。

表現力豊かな132点 日台の障害者ら 甲賀で16日まで /滋賀



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんバクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

毎日新聞 2017年7月5日
表現力豊かな作品が並ぶ「しがらきから吹いてくる
風」展＝滋賀県甲賀市信楽町の県立陶芸の森の産業
展示館内ホールで、金澤恵子撮影

甲賀市信楽町勅旨の県立陶芸の森の産業展
示館内ホールで、日本と台湾の障害を持つ人
たちの作品展「しがらきから吹いてくる風」
（毎日新聞大津支局など後援）が開かれてい
る。入場無料で16日まで。

同市信楽町神山の社会福祉法人しがらき会
が2011年から毎年、海外の作品と合わせ
て開く展示会で、7年目の今年は中華民国智
障者家長総会と共に主催。



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行